

郷土の染と織

南佐日 S 547 ~

繊維と染料

人間はいつも、良いもの、美しいものを着たいと望んでいる。化学繊維の著しい発達の恩恵を受けている現代人は、人間が本来的に持つ衣の願望を、十分に満たすことができるようになった。

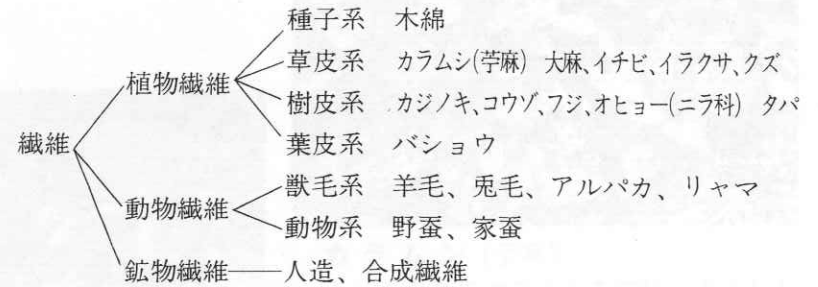
では化学染料や繊維も無かった時代は、どうしていただろうか。

人類が初めて織物を織ったのは、紀元前5千年から8千年頃であったと言われる。日本においては、縄文時代から弥生時代にかけての遺物から、織物の始原が確認されている。この時代の繊維は草木繊維であり、染料もまた草木染料であった。祖先たちは、衣生活を満足させる素材を、まず周辺 of 自然の中に求めたのである。

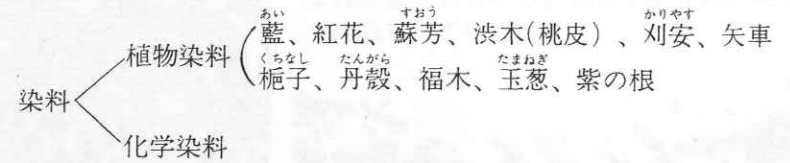
草木を中心とした自然素材の時代は、祖先たちの智慧と努力によって、多くの発明や発見を生み、化学素材に主役の立場を交代されるようになった現代まで、長い歴史と伝統を受け継いで続いてきた。

さて、私たちは現在、化学素材によってもたらされた豊かな衣料事情に満足している。しかし一方では、この充足の陰で、祖先たちが数千年の歴史をかけて築いてきた文化遺産を忘れそうになってはいないだろうか。豊かで安定した時代であるからこそ、今、先達の歴史をふりかえってみることができるのだと思う。草木染めや草木繊維には、化学素材には無い人間的なぬくもりが感じられるような気がする。

いろいろな繊維



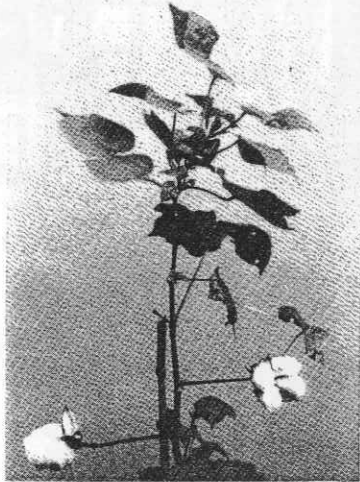
草木染料



草木染料と色

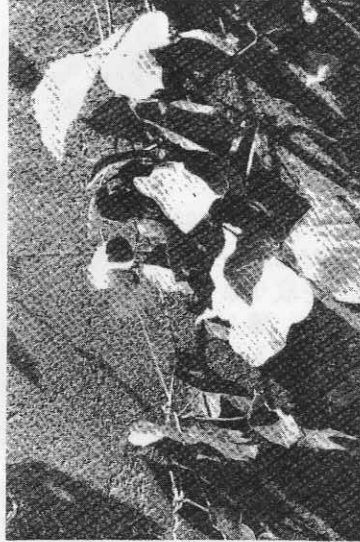
紺	藍
赤	紅花、蘇芳
黒	椎の木の皮、 <small>びんろうじ</small> 檳榔子
黄	刈安、梔子
茶	梅の木、矢車の実(榛の木)、渋木
紫	紫草の根

野原で見られる草木染織植物



ワタ (綿)

代表的草木繊維であるが、日本で盛んに栽培され、綿布にされたのは江戸時代以降である。肌への感触の良さは抜群で、庶民のあこがれの繊維であった。



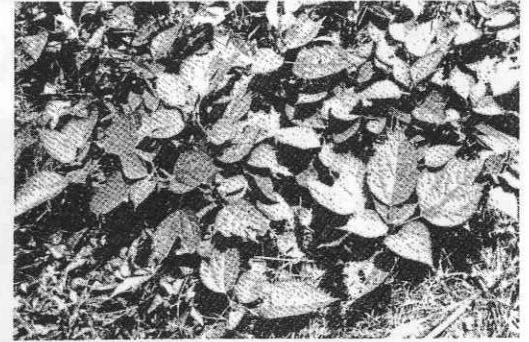
クズ (葛)

日本各地に自生する植物。初夏つるを刈り、熱湯に浸けた後水に浸け、積み重ねて発酵、皮をはいで撚りかけ糸にする。昔は衣料として、現在は壁紙を作るために利用される。



ヌルデ

山野に自生する落葉植物。ウルシ科の植物で、塗り物の漆の染料として知られる。幹と葉から取るタンニンが黒色に発色する。



カラムシ (苧麻)

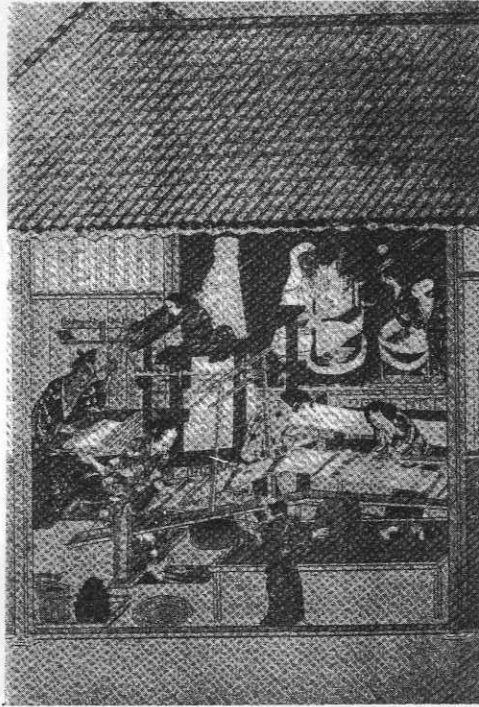
もっとも身近で見られる植物。古くから衣料繊維に使用された。その布は上布と呼ばれ珍重されている。現在でも沖縄、越後では織られている。



ヤシヤ (矢車)

日本の山野に自生する。カバノキ科の実を総称してヤシヤという。木酢酸鉄とか灰汁によって渋い青みの褐色とか、ネズミ色を染める。昔はおはぐろにも用いられた。

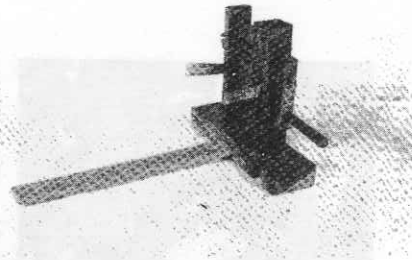
織る



はた おり し
機 織 師

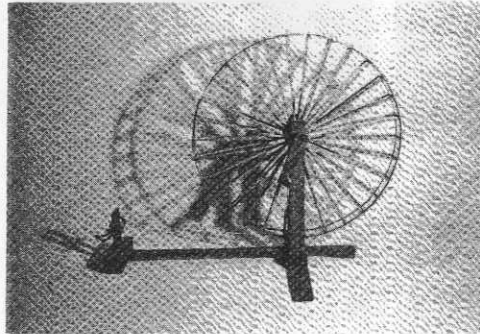
埼玉県川越市の喜多院所蔵の「職人尽絵」(重文)である。道路に面した土間に、絹織物用の織機が2台置かれている。奥の間では、老女ともう1人が3本足のタタリから糸を巻きとっており、入口では、糸巻きから杵の管に糸を巻いている少女が立っている。江戸初期の職人風俗がよくわかる絵である。

時節業草木草るたさ見た原程



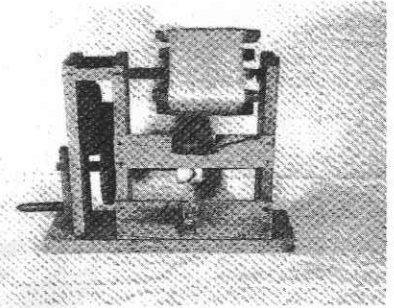
ワタクリ (綿繰)

摘んだ綿花から種子や実のからやごみなどを取り除く道具。ハンドルを回しながら、摘んだ綿花を回転するローラーの間に入れると、綿と種子が分別されて、綿だけが取り出せる。



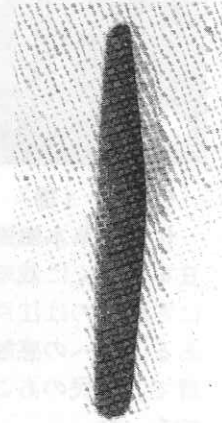
ツムギグルマ (紡車)

糸撚車とも言われる。絹糸や麻糸に撚りをかけるのに用いる。また緯ぐだに糸を巻くのにも用いる。



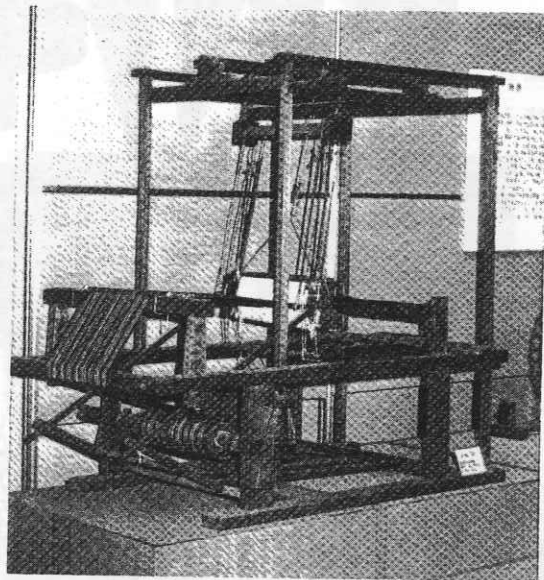
ザグリ (座繰)

沸騰する釜の中で繭を煮たて、その繭から絹糸を手繰り出し、ザグリザグリ巻き取る。



ひ 杵 (地機用)

杵の中に緯糸を巻いた管を入れ、経糸の開いた間を通す道具である。この地機用の大杵は、通した緯糸を打こむ役割も果たす。伊豆地方では、地機本体は全く見られないが、杵が残っていることから、昔は織られたものだと思う。

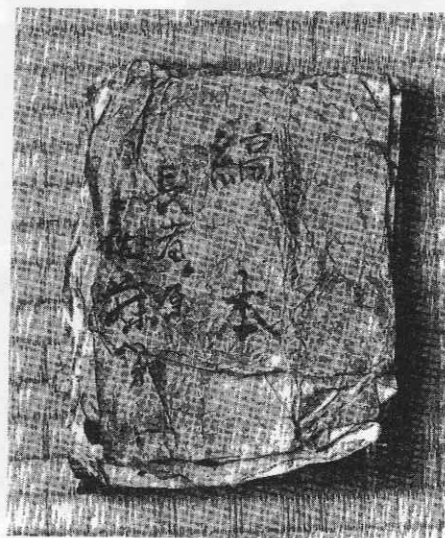
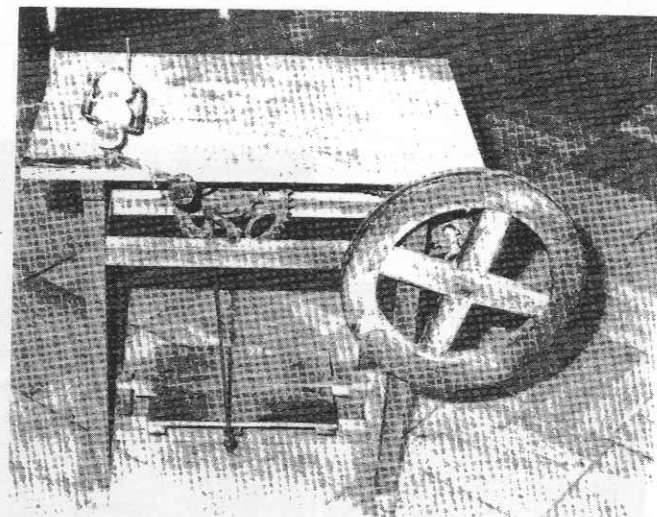


たか はた
高 機

地機の低いのに対して、高く腰をかけて織れることから付いた名称である。糸をとることから始まった仕事が、ようやく実って布地になるのである。トントンカラリという機織りの単調なリズムは、箴おさで緯糸を打ちこみ、投杼で緯糸を通す音である。

ほう もう き
紡 毛 機

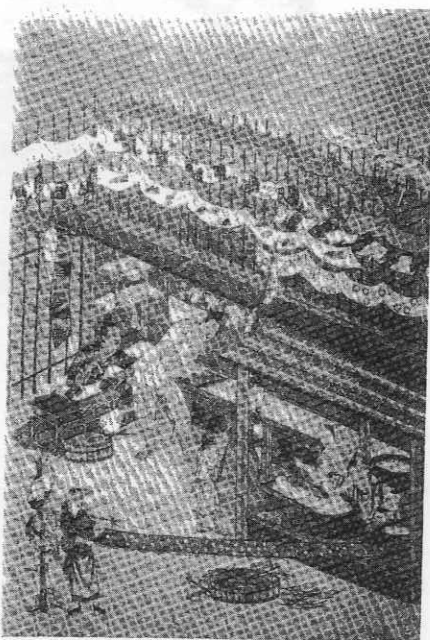
刈り取った羊毛は、染色され、ハンドカードにかけられた後にこの機械で糸になる。戦時中の毛糸不足の時、羊を飼って自家製の毛糸を作った農家も有ったようだ。



しま ちょう
縞 帳

機を織る女性たちは、いつもきれいな縞模様で織りあげたいと願っていた。そのため村で良い縞を織った者がいると、そのはしぎれをもらって、反古紙で作った帳面に張っておき、自分が織る時の参考にしたものである。

染める

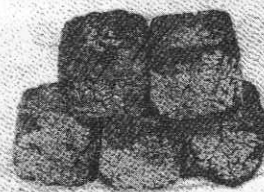
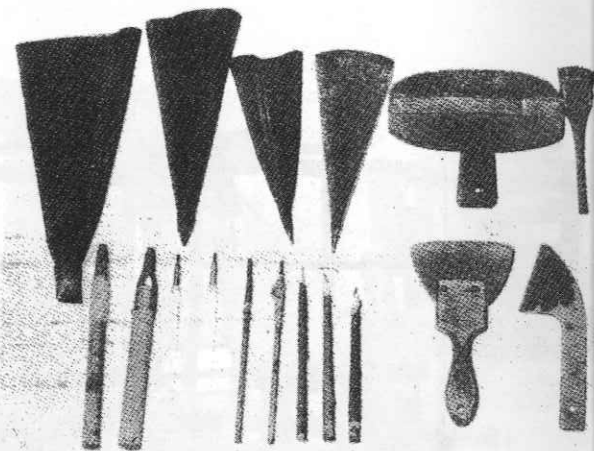


かた おき し 形置師

埼玉県川越市の喜多院所蔵の「職人尽絵」(重文)である。型紙染をしている絵である。文様を彫った型紙を布に置き、糊をすりこみ染めた後で糊を洗えば、文様が染めあがる。絵では、糊をへらですりこんでいる男、すり終えた布を藍甕に浸している女、手前の方では伸子を使って布を張って干している女なども見える。

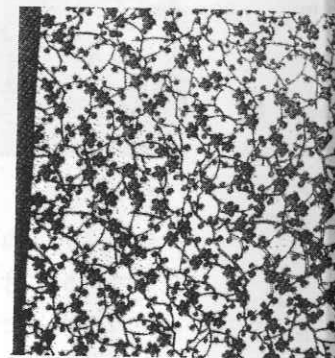
型染めの道具

型染めは、型紙を切り、糊置きをして、染め、糊を洗い流して、全工程を終る。それぞれの作業で使われる染めの道具には、職人の愛着がしみこんでいる。



藍玉

紺色に布を染める藍染は、草木染めの王者である。刈りとった藍を醗酵させ、かためて藍玉にする。この藍玉を灰汁の中でほぐして入れ、毎日かき回すと、10日ほどで泡立ってきて、染料となる。



型紙

型紙染に使う。和紙を何枚か重ね、表裏に生波をひいて、文様を四隅に連続させて合わせる。文様の四隅に穴を連続させて合わせて全体が連続する。

三島の染物屋

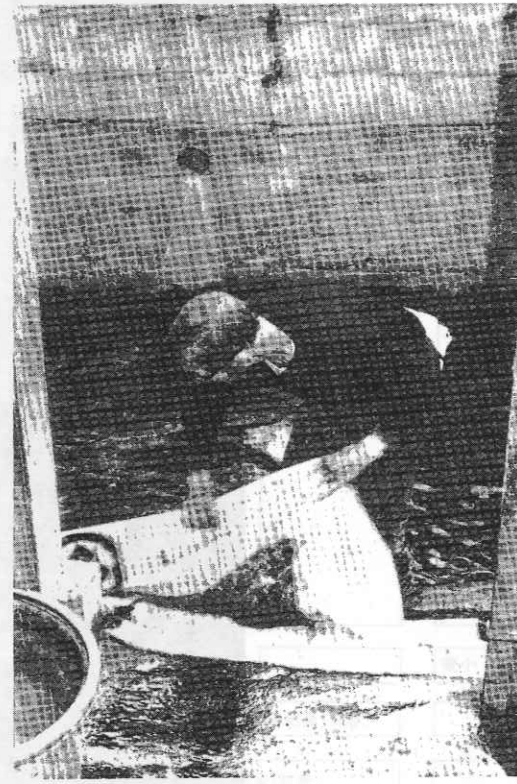
湧水の清流が町中を流れている三島では、今でも川添いに染物屋がある。
型染めの糊を流す風景は、三島の風物詩とも言える。



型置き

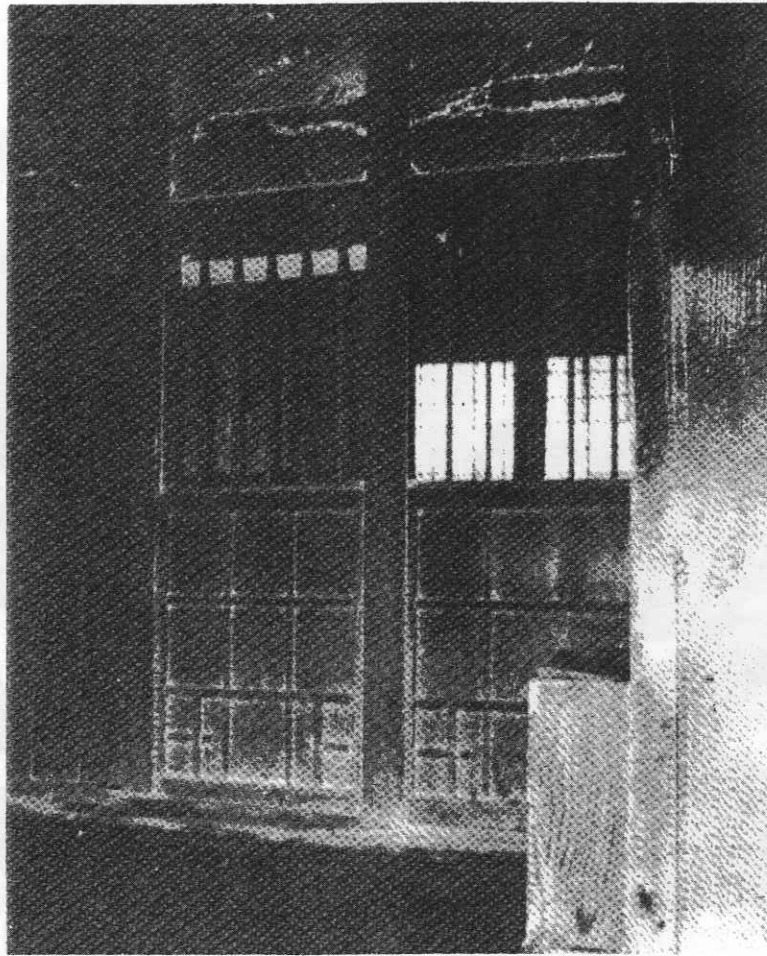


藍染め



糊落し

農村の女と手機



はた べ や
機 部 屋

私たちが伊豆の手機と呼んでいるものは、特別な伝統工芸の手機ではない。それは、つい一昔前まで、全国いたる所の農村で、素朴に続けられていた女の仕事としての手機のことである。

現代のように豊かな衣料事情になる以前は、人々の衣生活を支えてきたのは、女の力であったと言える。農家の嫁となる条件は、よく田を耕し、よく稲を刈り、更に機を織ることができることであった。嫁たちは、忙しい農業の合い間を見つけては、機部屋に入って、時には夜遅くまでトントンカラリと手機を続けたと言われている。

自家産のクズ繭で子供の晴れ着や娘に持たせてやる嫁入衣裳を織ったり、古着の木綿を裂いては、裂き織りの帯を作ったり、手機は嫁の生きがいでもあった。

全国には、女と機を結ぶ機神様の信仰や機に関する多くの民俗がある。伊豆では、「ハスと十六羅漢」と言う民話が伝えられている。それは、次のような民話である。

ハスと十六羅漢 (勝呂 弘編・続伊豆の民話集より)

ひとりの娘が、いじわるな母親のいる百姓家の嫁になった。義母は、嫁いできたばかりの嫁に、次々と困難な仕事を命じた。まずはじめは、1日に1人で1反歩の田植えをすることだった。嫁はすなおに聞いて、どうにか翌日には田植えをやってしまった。次に義母が命じたことは、1人で1日3反歩の田の草取りの作業であった。嫁は、つらい田の草取りも、涙を流しながら、すなおにやり終えた。またまた次に、義母は、難題を命じてきた。それは、ハスの糸をとって、ハス機を織れというのであった。嫁は、さっそく近くの池でハスの茎を刈ってきて、細い糸を引きだし、それを紡いだ。次には、ハス糸を機にかけて、ていねいに織り始めたのだった。里人は、嫁の手機の音が夜遅くまで響いているのを聞きながら床についたという。ようやく織りあがったハス布は、それはみごとな、一点の汚れも無いものであった。ある日、里に、ひとりのりっぱなお坊さんがやってきて、美しいハス布を見て、大いに感心した。お坊さんは、「私はこれまで、これほどみごとな布地を見たことがない。どうか、この布地に十六羅漢様を描かせてもらえないだろうか」と申し出たという。こうして、お坊さんの描いた十六羅漢様のハス布は、見ていだけで頭の下がる思いのする、ありがたいものになったという。

それは、どんな無理難題もすなおにきいて、嫁の仕事をつとめた女の美しい心を映し出しているようだったという。

手機
素朴

え
よ
つ
つ
て
て
。織
は

母
は

三島の染物屋

三島の町中には、楽寿園内
の小浜池と水上の孤池に湧水
の源をもつ、小さい川が清流
を走らせている。この小川に
沿って町を歩いねみると、現
在でも、いくつかの染物屋を
見つけることができるが、昔
とは比較にならないほど少な
い。染物屋にとって、三島の
きれいな水は、命の水でもあ
った。職人が清流に入って、
大社の夏祭りの浴衣の糊落し
をしている風景を、今でもな
つかしく語る人が多い。

昭和2年の静岡県の調査に
よれば、三島町には、22の染
物屋があったようだ。次の図
は、井上一雄氏の調査による
ものであるが、同じ頃のもの
であると考えられる。

三島の紺屋とその下職

